

ここに行けばもっと日系社会のことがわかります

日本や中南米各国には、日系社会のことを詳しく紹介している施設や美しい日本庭園があります。

日本人が海外に移住した経緯や歴史、現代の日系人のライフスタイルなど、さまざまなことを学べる施設は、日系人と日本人をつなぐ大切な場所。市民の憩いの場や観光スポットになっているところもあります。

日本

JICA 横浜海外移住資料館

Japanese Overseas Migration Museum



100年以上の日本人移住の歴史とともに、その社会や移住先での活躍、日本とのつながりについて紹介。常設展示やテーマを絞った企画展示のほか、移住や日系人社会に関連した講演会やイベントも開催しています。

〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港 2-3-1
<https://www.jica.go.jp/jomm/>

海外移住と文化の交流センター

Kobe Center for Overseas Migration and Cultural Interaction



海外移住の歴史や当時の街並みを写真や映像で紹介。移住先で使用されていた農具など、貴重な資料も展示しています。館内には、国際芸術交流のアトリエ、在住外国人支援を目的として活動している団体もあります。

〒650-0003 兵庫県神戸市中央区山本通 3 丁目 19-8
<http://www.kobe-center.jp/>

アルゼンチン

ブエノスアイレス日本庭園

Jardin Japonés de Buenos Aires



池泉回遊式の日本庭園。皇太子同妃両殿下（当時）のご訪問を記念して、1967年に造成されました。日系団体を中心に維持管理されているこの庭園には、茶室や太鼓橋もあり、都心のオアシス的な存在となっています。

Av. Casares 2966, 1425 CABA
<http://www.jardinjapones.org.ar/>

ブラジル

ブラジル日本文化福祉協会

Sociedade Brasileira de Cultura Japonesa e de Assistência Social



1955年の設立以来、子弟教育なども含めた日系社会の生活を支えるブラジル日本文化福祉協会。その施設内には講堂や展示ホールがあり、多くのイベントが開催されています。「ブラジル日本移民史料館」もこの中にあるほか、日本館などの運営も行っています。

Rua São Joaquim, 381 - Liberdade
01508-900 - São Paulo
<https://www.bunkyo.org.br>

ペルー

日秘文化会館

Centro Cultural Peruano Japonés



館内には1025席の「日秘劇場」のほか、日系1世としてペルーで活躍した実業家の名を冠した「平岡千代照日本人ペルー移住史料館」もあります。ここでは、一世紀にわたる日本人移民の歴史を、日本語パネルや展示物を使って詳しく紹介。観光スポットのひとつにもなっています。

Centro Cultural Peruano Japonés
Av. Gregorio Escobedo 803,
Residencial San Felipe,
Jesús María, Lima 11
<https://www.apj.org.pe/>

メキシコ

日墨会館

Asociación México Japonesa



1959年に日本とメキシコ両国の文化交流の殿堂として建設。広大な敷地内には、本館のほか、枯山水風の日本庭園、プール、テニスコートが設けられています。隣接する「あかね記念館」では、日本人メキシコ移住の歴史を詳しく紹介しています。

Fujiyama 144, Col.Las Águilas,
C.P.01710, CDMX
<https://amj.mx/>

ボリビア

ボリビア日本人移住資料館

<https://www.facebook.com/nikkailp/?f=381554465213291>

オキナワ移住地 オキナワ・ボリビア歴史資料館

連絡先: abjok@cotas.com.bo

サンファン移住地移民資料館

連絡先: abjtv@abj-sanjuan.org.bo / abjtv@abj-sanjuan.org.bo

パラグアイ

写真集「パラグアイの中の日本」

https://www.py.emb-japan.go.jp/itpr_ja/fotos_paraguay_japon.html

外務省 〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1

編集: 中南米局 発行: 国内広報室

2025年3月発行

外務省中南米地域
情報はこちらから!



外務省

Ministry of Foreign Affairs

世界と中南米の日系人

世界全体の推計日系人数は約500万人。

このうち、6割を超える約310万人の日系人が中南米に暮らしています。



世界の推計日系人数

(令和5年10月1日現在)

ブラジル	約270万人
米国	約150万人
ペルー	約20万人
カナダ	約12万人
オーストラリア	約10万人
メキシコ	約79,000人
アルゼンチン	約65,000人
ボリビア	約13,000人
パラグアイ	約10,000人

中南米のその他地域の推計日系人数

チリ	約3,600人
コロンビア	約3,100人
キューバ	約1,000人
ドミニカ共和国	約760人
ウルグアイ	約460人
ベネズエラ	約300人
中南米全体	約310万人

Interview

困難を乗り越えて活躍した中南米の日系人

移住の歴史と経済社会開発への貢献

今でこそ飛行機で簡単に行ける中南米。

しかし、かつては船で何ヶ月もかけて行かなければならない遠い場所でした。

そんな地球の反対側にある異国へ、人生を賭けて出発した移住者たち。

苦難の歴史を乗り越え、今の日系社会の礎を築いた彼らの活躍を、

独立行政法人国際協力機構(JICA)職員の武田浩幸さんにお聞きしました。

「移住」はとてつもなく大きな人生の選択

日本から中南米への移住は、1880年代から1960年代にかけてさかんに行なわれましたが、ひとくちに移住といっても、その歩みは時代(戦前か戦後か)や国、地域によって大きく異なります。とくに戦後、JICAはその前身の時代から、さまざまな移住政策に携わってきました。1908年、781人の日本人家族が、コーヒー農園で働く契約移民として「笠戸丸」に乗りブラジルへ向けて出発したことは、ご存知の方も多いと思います。彼らは、数年間は働き、貯金した後に帰国することを夢見ていましたが、実生活は予想だにしない過酷な状況でした。当時のブラジル移民受け入れは、同国の奴隷廃止による労働力不足を補うものだったとも言われるほどです。しかし、それにも屈せず、多くの人が自作農となる道を選び、資金を出し合って集団入植地や農業組合を形成していきました。それらはその後、ブラジルの農業界で大きな役割を果たす組織にまで成長しています。

未開の土地では原始林や風土病に悪戦苦闘した地域もありましたが、移住者はそれを乗り越え、各地で農業発展に大きく貢献しました。たとえば、パラグアイでは国の主な産業である大豆栽培をリードし、ボリビアでは米や大豆、小麦、柑橘類栽培などの発展を支えています。また、それまで野菜を食べなかった地域で野菜栽培を定着させ、現地の食生活改善に貢献したケースも少なくありません。

アルゼンチンは、沖縄系の方が多く、他の南米諸国から転住してきた人も多数います。その多くは、花卉栽培やクリーニング業に従事しました。彼らが基礎を築いた花卉栽培は今日、アルゼンチンの産業のひとつであり、日系人の貢献はよく知られています。ドミニカ共和国には、移住事業により1956年から1319人が入植しましたが、入植先に関する事前調査や情報提供が適切に行われなかったなどの事情により、生活の立ち上げにあたって多大な困難に直面しました。今も、移住者との対話を通じて、課題解決に向けた対策がされています。

こうした移住者の方々の困難は当事者ではない私たちに計り知れません。だからこそ、その歴史や移住の尊さを語り継ぐことが、大切なのだと思います。



中南米で信頼を築き上げた日本人

外国で信用を築くことは、決して容易なことではありません。しかし、中南米各国に移住した日本人たちは、異国で大変な苦勞を重ねながらも、大きな信頼を得てきました。たとえば、ブラジルでは「Japonês Garantido (日本人は信頼できる)」と言われるほどです。高度経済成長期に日本企業がブラジルに進出した際には、その仲介役として日系人が重要な役割を務めました。日系人への好意的な評価が、日本企業のブラジル市場への進出を容易にしたともいえるでしょう。欧州系移民が多いアルゼンチンにおいても、「日系人は正直で勤勉」という印象が浸透しています。移住者たちが営んでいたクリーニング業が、納期厳守でお客本位の誠実な接客であったことも、その背景にあることは間違いありません。パラグアイでは、困難に立ち向かい原生林を切り拓く姿と実績が、日系人に対する大きな信用となりました。こうして先人のたゆまぬ努力によって築かれた日系社会は、はるか彼方で、日本のことを強く思ってくれています。また、ペルー、メキシコ等、これら以外の中南米の国々でも多くの優秀な日系人材が活躍されています。今後、次世代の人材を含めて彼らとの絆を強化し、日本語、日本文化(サブカルチャー、邦楽、舞踊、日本食普及を含む)、高齢者支援、ビジネス、伝統武道を含むスポーツ、学術交流、医療技術、日本の自治体との関係強化、多文化共生等、様々な分野でパートナーとして連携していくことは、日本の大きな国益につながるに違いありません。そのためにも、より多くの人に移住の歴史や日系社会のことを知ってもらいたいと願っています。

武田浩幸 ● 学生時代にブラジル・ベレンでの1年間の生活体験を通じ、日本人の海外移住・日系社会の尊さを学ぶ。その後、JICA職員として20年以上にわたり、ブラジル、パラグアイ、ボリビア、アルゼンチン、チリに勤務。公私に亘り日系社会と深く関わり、「日系社会と日本の関係強化への貢献」は、「人生における軸」となっている。



中南米の日系社会

これまで、中南米各国で日系人によるたくさんのイベントが行なわれてきました。近年見られるのが、日系人ではない人たちの参加。中南米の日系社会は着実に広がっています。日系人を家族に持つ人だけでなく、周辺の住民が参加するケースも増えています。

Mexico メキシコ

メキシコへの移住は、外務大臣を務めた榎本武揚のイニシアティブにより、1897年に35名の日本人がメキシコ南部チアパス州に上陸したのが始まりです。これは中南米への最初の組織的移住でした。その後、メキシコ革命や第二次世界大戦といった苦難の時期を経て、メキシコの日系人は、現在約7万9000人と推定されています。またメキシコ人の中でも、元留学生などを中心に、日本文化への興味関心が高い方が増えてきています。日本人とメキシコ人が共に学ぶ日本メキシコ学院や、日系人が設立した日墨協会の活動も活発です。日系であるなにかかわらず、知日派親日派全てを「拡大日系社会」として、日墨間交流の一層の活性化が進められています。



メキシコの日系青年が企画・運営する交流イベント「Vibra Joven」

日本メキシコ学院

カリキュラムに準拠した日本コース（小学部と中学部）と、メキシコのカリキュラムを学ぶメキシココース（幼稚園～高校部）とがあります。日本コース在校生は120名、メキシココース在校生は975名、計1095名（2024年12月1日現在）がここで学んでいます。日墨両国友好のシンボリック存在である同学院は、これまでも皇族や日本政府要人が多数訪問しています。近年では2014年7月に安倍総理大臣のメキシコ訪問に同行した安倍総理夫人が、同年10月には秋篠宮同妃両殿下が訪問されました。また、同学院は2017年に外務大臣表彰を受賞しています。



アレハンドロ・バサーニェスさん
(1992年卒業)

これまで、在日メキシコ大使館（一等書記官兼文化担当官）や国連などで、さまざまな仕事をしてきました。常に心にあるのは、日本メキシコ学院の「人生の目的は単に経済的安定を求めるものではなく、自分の美徳を高めることである」という教え。日系でない私がこの学校で学んだことや、卒業後に留学した日本での経験は、私の人生に特別な視点を与えてくれました。



全校生徒が参加して行われた運動会の様子



Colombia コロンビア

コロンビアへの最初の日本人移住は、1915年、個人移住から始まり、2025年には移住110周年を迎えました。最初の移住者が到着したバランキージャ近郊のウシアクリ市には、出身地広島県竹原市にちなみ、赤い鳥居が目印の竹原ハウスが建てられ、日本とのつながりを今でも大切にしています。

コロンビア最大の日系社会があるカリ市は、1929年に始まった移住者の子孫が中心となって、日本語、武道から漫画に至るまで様々な活動を積極的に行っています。日本人コロンビア移住95周年の2024年には、日本が特別招待国となったカリ国際図書展で日本の芸術家の参加も得て、紙芝居、書道、料理、武道等の実演を通じ、過去最大60万人の市民に様々な日本文化を紹介するうえで大きな役割を果たしました。



カリ国際図書展における風呂敷デモンストレーション



ウシアクリの竹原ハウス



Cuba キューバ

1898年9月9日、汽船オリザワ号にてハバナに日本人移民が初めて到着、1919年から1926年にかけて、砂糖産業を中心としたキューバ経済の好況を受けて沖縄県・広島県・熊本県等出身の多くの日本人がキューバに移住しました。

第二次世界大戦に伴い、日本人・日系人男性約350人が「青年の島」の監獄に収容された上、資産を接収される等の苦難の道を歩きました。しかし、その後、農業・商業・芸術等様々な分野で活躍し現在に至ります。

キューバには、「青年の島」を拠点とし、法人格を有する「青年の島日系人会」とキューバ本土を拠点とする「キューバ日系人連絡会」の2つの日系人会が存在し、約1,000人の日系人がそれぞれの会に所属し、各種文化活動を行っています。



青年の島日系人会によるお盆行事の沖縄舞踊

Cuba

Ecuador

Ecuador エクアドル

エクアドルは他の中南米諸国と比較すると日系人が少ないものの、在留邦人を含めて約330名の日系人がいます。

エクアドルに最初の日本人が移住したのは1963年であり、黄熱病の研究に従事するために野口英世がエクアドルに入国した1918年から45年後のことです。日本人移民の歴史は、マニラ麻（アバカ）やバナナなどの農業が中心で、その後、石油輸出ブームもあり徐々に移住者が増えました。日系人の方々は、エクアドル社会に溶け込みつつも、日本の文化や伝統を守り続けています。

本格的にコロナ禍が開けた近年は、大使館や他団体が各地で日本文化行事を開催し、多くの方々が参加しました。日本の文化を広め、日本とエクアドル両国関係の更なる発展に取り組んでいます。



キューバ日系人連絡会による慰霊祭

Venezuela ベネズエラ

ベネズエラの日系社会は約300人規模と推定され、他の中南米諸国と比較するとそれほど多くはありません。そんなベネズエラへの最初の日本人移住は1928年という記録があり、以来、日本人移住者は様々な分野に身を投じ、商業、経済、医療、学術、芸術、外交などで成功を納め、少数グループでありながら、ベネズエラでの信頼を生み出してきました。

近年、多くの人々がベネズエラを去ってしまいましたが、ベネズエラに残る日系人は、ベネズエラの友人らとともに、教育や祭りなど種々の活動を通して、日本の文化や伝統を広め、日本とベネズエラの更なる交流の促進に取り組んでいます。



ベネズエラ日系人・日本人連盟と日本語クラスのメンバー



「祭り2024」での盆踊りの様子

「りゅう祭2024」で行われた盆踊り。行事全般を通して約800人が来場。



日本文化センターによるお茶会の様子





マチュピチュやナスカの地上絵で有名なペルーには、世界第3位の約20万人の日系人がいます。ペルーの日系人は、移住開始初期、南米最初の契約移民として過酷な農業に従事し、戦時中の排日運動等乗り越え、ペルー社会に溶け込み、2024年には、日本人ペルー移住125周年を迎えました。現在、ペルーの日系人は、故フジモリ元大統領を輩出した政治を始め、経済、芸術、食文化（ペルーは美食の国とも言われ和食とペルー料理の融合した「ニッケイ料理」があります）等の幅広い分野で活躍中。近年、若手日系人の活躍は著しく、各国の若手日系人との交流行事の開催等を通して、日系人としてのアイデンティティ強化、ペルー社会における親日家の増進に貢献しています。



日本人ペルー移住125周年事業「Nikkei Run」
(2,500人が出場した5kmと10kmのマラソン大会)



MOVI(モビ:
若手日系人
グループ)の
メンバー



日秘総合診療所

リマには、ペルー日系人協会が運営する診療所と病院があります。1981年開設の「日秘総合診療所」は、現地の人たちの信頼も厚い医療施設で、日々4,000人以上の人が利用しています。2005年開設の「日本人ペルー移住100周年記念病院」は、最先端の医療設備・機器を備え、効率的で心のこもった質の高い医療サービスを提供する非営利機関。年間10万人以上の人々が利用し、ペルー社会の発展と福祉に大きく寄与しています。



日秘総合診療所(出典:同診療所サイト)



日本人ペルー移住100周年記念病院



ペドロ・サモラ・ゴンサレスさん

日本人ペルー移住100周年記念病院医師

私の妻とその両親は日系人です。当病院での勤務経験を通じて、私自身も日系社会の一員となり、生活と仕事の両面で、日系人が持つ価値観をさらに学ぶことができました。その価値観とは、職業倫理、効率性、時間厳守、教育、礼儀、そして素直であること、人を助けることの喜び、人へ温かく接することなど、数え切れないほど。この価値観が、私を人として成長させているのだと、日々実感しています。



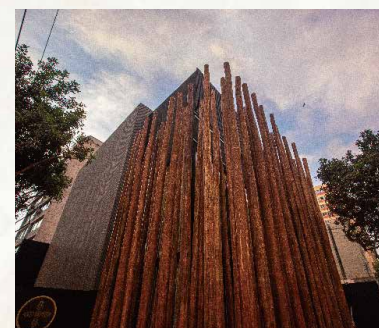
スサナ・テルキナ・カナシロさん

日秘総合診療所利用者サービス課課長

私は19年間日秘総合診療所にて勤務しています。患者さまに満足度の高いサービス提供を行う利用者サービス課で勤務ができ、とても満足しています。職場は、日系の環境で、皆が同じ理念を持って勤務しており、アットホームで働きやすい環境です。

世界のグルメシーンで注目を浴びる、 日系フュージョン料理のレストラン「MAIDO」

2009年創業の「MAIDO」は、2013年にラテンアメリカのベスト・レストランに選ばれて以来、同タイトルを4度も獲得し、さらに南米のベスト・レストラン2024のタイトルも得ました。「MAIDO」のメニューは、世界中の高級レストランで味わえるハイ・コンセプトの料理ばかりでなく、ラーメンやどんぶりのように、人々に愛されている料理を遊び心たっぷりに提供しています。その味は、さっぱりとしたものから、こってりとしたものまで、簡単に楽しむことができます。ペルーの味と技法に日本の影響をこれほど見事に融合させたのは、日系2世のシェフ、ミツハル・ツムラ氏がニッケイ料理の真の達人であるからこそ。くつろぎと安らぎを感じさせ、素晴らしい料理でお腹も心もいっぱいさせる場所です。



2024年にリフォームした「MAIDO」

(出典:日系フュージョン料理のレストラン「MAIDO」<https://www.maido.pe/>)



日系2世のシェフ、ミツハル・ツムラさん



日本からブラジルへの移住は1908年に始まりました。現在約270万人の日系人がいるといわれ、世界最大の日系社会を形成しています。日系人は、政治、経済、文化など多くの分野において日本とブラジルの関係強化に大きく貢献しています。柔道や茶道、盆踊りなどの伝統文化を大切に継承するとともに、日本のアニメや漫画、J-POPなどのポップカルチャーも、日系・非日系問わず幅広い世代に人気を博しています。特にサンパウロの「日本祭り」は、和太鼓やコスプレ大会、各都道府県の屋台等が盛り上がり、毎年約20万人が参加する世界最大規模の日本文化イベントです。ブラジル全土で日本文化を紹介するイベントが開催され、多くのブラジル人が日本文化や日本食を楽しむ風景が見られます。



サンパウロ日本祭りの様子



ブラジリア
日本祭り

Brazil

ブラジル日系社会のシンボル「リベルダーデ」



写真提供元:リベルダーデ文化福祉協会

サンパウロの中心部に隣接するリベルダーデ地区は、世界最大規模の日系人の街。赤い鳥居をくぐると、提灯を模した街灯が並ぶ風景に迎えられます。地区内には、寺院や日本庭園、日本食レストランが点在し、まるでブラジルにいるとは思えません。中国系や韓国系の移民も多く、東洋人街とも呼ばれています。



沖縄そば市場

印象的なモニュメントに迎えられるのは、ブラジルのマットグロッソス州カンボグランデ市にある中央市場。沖縄出身の日本人移住者が多いカンボグランデ市では沖縄そばを食べることができ、毎年8月に「沖縄そば祭り」が開催されています。

写真提供元:Feira Central de Campo Grande

世界最大規模の日本祭り



日本祭りが中南米でブームに?!

ブラジルをはじめ中南米各国で日本祭りが数多く存在しています。なかでも、サンパウロを中心に活動を行うブラジル日本都道府県人会連合会(県連)が主催する「日本祭り(Festival do Japão)」は、毎回約20万人の参加者を集める、世界最大規模の日本祭りです。和太鼓や日本舞踊等のパフォーマンスや、コスプレ大会等が開催される他、各都道府県の郷土料理が食べられる飲食店や日系企業ブースが出店されて賑わいます。

J-POPに和太鼓で盛り上がる「祭りダンス」

「マツリダンス」とは、和太鼓をバックにJ-POPのヒット曲を踊るオリジナルダンスのことです。1980年代後半、パラナ州マリナガ文化体育協会青年会が、チェッカーズの曲で踊った盆踊りが原点とされています。2003年、同州ロンドリーナ市の若手日系人団体「グループ3世」が、この独特のダンスを「マツリダンス」と命名し披露。その後、ブラジル各地に広まっていきました。現在のレパートリーは約40曲に達し、日本祭りに欠かせない存在となっています。



J-POPと盆踊りがミックスした「祭りダンス」でイベントは大盛況!
© Giuliano Glaucia Expo Japão 2017 oficial



UNDOKAI(運動会)

各地で日系団体が中心となって「UNDOKAI」が開催されています。日系人ではない方も多く参加されます。

写真提供元:イタベセリカ文化体育協会





Chile

チリ



2010年から続けられているお花見。今回、今年2月に発生した
大火災からの復興と回復を祈念してお花見が開催された

チリは近隣国と比較すると日系人が少ないものの、約3,600人の在留日系人がいると推定されています。在留日系人数こそ少ないですが、チリに移住した日系人の方々は、チリ社会に溶け込みつつも、日本の文化や価値観を守り続けており、日系人会等がその活動を支えています。日系人会が主催する日本食フェスやお花見等、伝統行事の開催を通じて、地域社会との交流も盛んに行われています。また、今日、チリの日系人は当地において政治家、政府関係者、企業家、学術等の分野で活躍し、チリ社会に貢献を続けています。また、最近では3世、4世(20代から40代)の若手の活躍も目立ち、医療関係者や新聞記者から映画監督までその活動は様々です。



チリ中央日本人会
70周年を記念して開催された
「日本食フェス」。
約400人が来場。



Argentina

アルゼンチン

約6万5千人の日系人、約100の日系団体が活動するアルゼンチン。2023年に日本アルゼンチン修好125周年を記念し国際日系スポーツ親善大会(CONFRA)を開催しました。2026年は日本人移住140周年を迎えます。勤勉・努力家と評される日系人は主に洗濯店や花造りを生業として現地社会で信頼を獲得、エスコバル花祭りは国家イベントに成長しました。各地で開催される盆踊り、武道や盆栽などの伝統文化は現地の人からも人気を博し、アニメ・コスプレ等のポップカルチャー、寿司・ラーメンの食文化も流行しています。ブエノスアイレス市中心に位置する日本庭園は観光名所として、市の文化施設に指定され、入場には長蛇の列ができています。日系人の約7割は沖縄県にルーツを持ち、沖縄太鼓・エイサーを披露するグループも人気になっています。

ミシオネス州オベラ市の
国民国家移民祭
国内各地で
日本アニメは大人気



ブエノスアイレス州
エスコバルで
毎年開催される
花祭り



トマス・サンティアゴ・スカネタさん
(2009年卒業)

幼少から大人になるまで学んだ日亜学院は、私の第二の家。素晴らしい教育だけでなく、いつも私を助けてくれる友だちができた、かけがえのない場所でもあります。現在、麻酔学を専門とする医師として働く私を育ててくれたのは、日亜学院での日々。規律や尊敬の心、成功への誇りや目的達成のために努力する日本ならではの精神は、心の支えとなっています。



Bolivia

ボリビア

ボリビアに最初の日本人移民が移住したのは1899年に遡り、現在、約13,000人の日系人が暮らしています。ボリビア各地には約15の日系団体がおり、それぞれの地において、毎年日本文化紹介イベント、日本語教室等を通じて、現地ボリビア人との交流を深める地道な努力を続けています。

2024年は、日本人移住125周年及び外交関係樹立110周年を機に、各地で日本文化行事が開催されました。9月には、サンタクルスにおいて各地の日系団体合同で、「第一回日本祭り」が盛大に開催され、これまでの当地日系社会の地道な努力の成果により10,000人以上が来場しました。参加者からは毎年の開催を望む声が多く寄せられました。



2024年9月にサンタクルスにおいて開催された
各地日系団体合同「第一回日本祭り〜絆〜」



Paraguay

パラグアイ

約1万人と言われるパラグアイ日系社会の最大の特徴は、高度な日本語教育と女性・若者の活躍です。毎年開催される日本語能力試験では、各日本人会が運営する日本語学校などの多くの生徒さんがN1、N2に合格しています。また、ビジネス、教育、医療など様々な分野で活躍する女性が集まる「パラグアイ日系女性の会」、日本文化行事で日本食の提供、浴衣の着付け等を行う各日本人会の婦人部を代表とする女性の活躍、地元の夏祭り等の日本文化行事を主催する日系3世を中心とした若者の活動が特徴的です。2024年9月には、女性・若者をはじめ、日系社会全体が一丸となり、30年ぶりにパラグアイで開催されたパンアメリカン日系人大会(COPANI)を成功に導きました。



パンアメリカン日系人大会(COPANI)



日本語スピーチコンテストの様子

「コチャバンバ
日本文化フェア2024」
現地日系団体及び
イベント関係者

ブエノスアイレス日亜学院

同校はブエノスアイレス市教育省の正式な認可を受け、日本語教育をカリキュラムに取り入れたトリリンガル(日・英・スペイン語)校。日本とアルゼンチン両国の教育法や価値観を取り入れ、アルゼンチンの発展に貢献できる人材を育成しています。日本文化紹介や日本ツアーを企画するなどの功績が認められ、創立90周年の2017年に、日本の外務大臣表彰を受賞しました。



ブエノスアイレス市の日本庭園で
沖縄太鼓、エイサーを披露する若手日系人達



ブエノスアイレス州
フロレンシオバレーラ市の
日系団体が開催した祭り。
やぐらを囲み、多くの日系人・
非日系人が踊りを
楽しんでいます。

日系人とはどんな人？

私、nikkei人
です！

Interview

中南米には、私たち日本人とルーツをともにし、日本と各国の架け橋になっている「日系人」がいます。日本からの移住者およびその子孫である方々は、各国で日系団体を設立し、日本文化の継承と普及に大きな役割を果たしてきました。日本人の海外移住は、1868年のハワイへの集団移住から始まりました。メキシコやブラジル、ペルーなど中南米への移住の歴史は、125年以上も前にさかのぼります。(各国の日系人数は1ページをご覧ください)日本から各国に渡った方は1世、その子や孫は2世、3世と呼ばれ、近年は6世も誕生しています。これらの方々は、新たなネットワークを築きながら、各界で幅広く活躍しています。




メキシコ
バニア・デ・ラ・ベガ・シオタ・ゴンサレス
メキシコ国立自治大学アジア・アフリカ研究プログラム事務局長(日系4世)

日本研究の第一人者として、「日本文学とジェンダーに関する国際セミナー」や東京大学と共催の討論会を開催するなど、日本を含むアジア・アフリカ社会に関する研究協力や理解の促進に尽力。




ブラジル
エミ・レナータ
モデル

1986年、ブラジル・サンパウロで日系ブラジル人の父、イタリア系ブラジル人の母のもとに生まれる。14歳の時にサンパウロ市内でスカウトされ、モデルの仕事を開始。2004年から日本を拠点にファッション雑誌やファッションショーなどで活躍。20代後半はニューヨークを行き来するなど世界でも活躍。2021年に結婚、現在は2児の母となりイタリア在住。




パラグアイ
前原ビクトル
実業家(日系2世)

養鶏、農畜産、不動産会社、金融機関等5社の役員。前原氏が役員を務める鶏卵ブランド「YEMITA」は国内販売シェアトップ。チャコ地方の広大な農場を保有し、良質な牛肉製品等を販売。




ブラジル
西森弘志ルイス
政治家(日系2世)

現連邦下院議員兼伯日友好議連会長であり、元パラナ州議会議員の日系人政治家。2011年から連邦下院議員を務め、伯日友好議連の会長として日伯関係の強化に尽力。パラナ州と兵庫県、自身の出身地である高知県との交流を活性化し、伯日経済ミッションの団長として25回訪日し、農業分野での日伯協力促進に貢献。




ベネズエラ
村木貞夫
ピアニスト・指揮者(日系2世)

カラカス市民交響楽団でピアニスト・指揮者として活躍。2009年からは、リベルタドル市交響楽団財団会長に就任。ベネズエラ映像音楽大学で講師も務め、中南米を中心に諸外国でもコンサートを行い、国際的に活動中。




ブラジル
アウグスト・アキオ
アスリート(日系3世)

2024年パリオリンピックスケートボード男子パークで銅メダルを獲得。(Luiza Moraes/COB)




アルゼンチン
ジェニファー・オオシロ
歴史家(日系3世)

日亜外交関係樹立125周年を迎えた2023年、31年ぶりにアルゼンチンで開催された国際日系スポーツ親善大会(CONFRA)の実行委員長を務め、約1500名が参加した大会を成功に導いた。自身も会長を務めたアルゼンチンの若手日系団体セントロ・ニッケイが中心となり、250名以上の日系ボランティアが大会を支えた。




ペルー
マルセロ・ウォン・ガヤ
芸術家・陶芸家(日系4世)

現代美術の彫刻分野では国内外で高い評価を受けている。柔らかく丸みを帯びた形や新鮮な視点、そして現代的なアプローチを用いた作品作りが特徴。2024年にはサンリオのハローキティとコラボレーションを実施し、現代彫刻のスタイルとハローキティのポップな魅力が見事に融合された作品を作りあげた。



ボリビア
ペドロ・シモセ
作家・詩人(日系3世)

1972年に詩集「僕は書きたいのに出てくるのは泡ばかり」がキューバの「カサ・デ・ラス・アメリカス賞」を受賞、1999年にボリビア国民文化賞を受賞。ボリビアを代表する作家・詩人の一人であり、その作品はボリビアの教科書に掲載されるなどボリビア国民に広く親しまれている。また、日本文学に対する造詣が深く、記事の執筆や講演を通じ、日本人の作家・文学、日本人移住の歴史をボリビア国民に広く伝え、対日理解の促進に貢献。



ペルー
トニー・スカー・タイラコ
音楽プロデューサー、作曲家、ドラマー(日系3世)

サルサ音楽やラテン音楽の分野で著名。アルバム「Mas de Mi」で国際的に注目を集め、グラミー賞(ラテン・グラミー)にノミネートされるなど、高い評価を得ている。2019年、マイケル・ジャクソンの名曲をラテン音楽スタイルで再編成したアルバム「Unity」は、ラテン・グラミー賞で複数の賞を受賞。



ブラジル
當間ローズ
歌手 俳優 華道家(日系3世)

僕が日本に引っ越して来たのは5歳の頃。以前から出稼ぎに来ている父の元へ、母と2人で日本へ。

祖父(沖縄出身)や父から日本の良い所を沢山聞いていました。初めて飛行機に乗る事は、母と冒険に出かけるようで、不安よりも希望でいっぱいだった。日本に来て、愛知県に住む叔母のお家で数ヶ月住み、その後は静岡県に、地元の公立小学校へ入学する事になりました。

日本へ来てから母や大人しか周りに居ない環境だったので、同じ年代の子供達に逢えるのが、とっても楽しみでした。ワクワクとドキドキを親戚からももらったランドセルに詰め込んで初登校しました。父から教わった日本語で自己紹介「ワタクシ ノ ナマエ ハトウマ デス。ブラジル カラキマシタ。ヨロシクオネガイシマス。」初めての日本語でした。結果は、発音が悪かったのか？ ブラジル=ブタジリに！

次の日から、あだ名はブタジリ人。その意味さえ分からなかった僕には、皆が僕を歓迎し笑い喜んでいて少し嬉しかったです。でも実際は違いました。肌や目の色、髪の色など容姿が違う事、言葉が上手く話せない僕は孤立してしまいました。先生から髪の毛を黒く染めてくるように言われた事も。友達が居なかった僕の唯一の友達も、TVや、祖父がくれた故郷、沖縄の歌が入ったCDだった。TVに映るスター達が救いで憧れてました。

自分で学んだ初めての日本語は「仲間に入れて！」 みんなに沢山話した。けれどイジメはエスカレートしていきました。ある日、お風呂に入っている時、母が急にお風呂に入ってきて、そこで、母は僕のアザだらけの身体を見て、泣き叫びました。次の日、学校へ向かった。母は、片言の日本語とジェスチャーで先生に思いを伝えていた。おかげでイジメは減りました。後日、僕の家へイジメた子達と親達も、菓子折を持って謝りに来ました。その時、僕は初めて、いじめっ子達の、それぞれの家庭を見てそして気付きました！『僕も、その子の趣味や好きな事や家族の事を何も知らない』って、一方的に「仲間に入れて」や「僕はこうなんだ」って伝えても、一方通行



Message
パラグアイ
豊歳マリオ
駐日パラグアイ共和国大使

生まれも育ちもパラグアイでありながら、家では日本人家族で高等学校までアメリカンスクール。大学は日本と北米で学び、仕事では中南米、ヨーロッパ諸国を回りつつ、20年間のカナダでの生活を経て、2024年より駐日パラグアイ共和国大使として、新生活を始めました。このような背景で自分のアイデンティティーは「日系人」としての意識は薄いですが、行く先々で周りに溶け込み、受け入れてくれた個々の社会の一員として認められる努力をしてきました。



の思いだったと。その経験から僕は学んだのです。自分を受け入れてもらうには、まずは相手を受け入れなければならない。「意見を伝える」よりも先に「相手を知り理解する」という事がとても大切だと言う事。その経験で僕は、沢山の血が入った自分を、日系ブラジル人としてのルーツや思いを大切にしようと思うようになりました。

そして自分のルーツを「知ろう」と！日本の文化や食、伝統や歴史を学ぼう！

今は心から『日本に来て良かった！日本の全て大好き！人も景色も環境も文化も伝統も大好き！その素晴らしさ、日本の良さを、日系人としてブラジルに、世界中に伝えて行きたい。』と思います。

思えば祖父は、いつだって自分の祖国と沖縄を忘れた事は一度もなかった！ブラジルでも、お正月になれば、お雑煮を食べたし、カチャーシーも良く一緒に踊りました。

僕の父の口癖は「humilde e respeito por tudo(謙虚さを胸に全てに敬意を!)」

荒れた地に花を咲かせたのは先人達のこの想いかも知れませんが。僕の好きな食べ物は梅干しと柴漬けです！好きな飲み物は日本茶(静岡茶)です。シラスコと緑茶のコンビネーションは最高！外国と日本の血を持つハイブリッドな僕だから出来る異文化共生を伝えていけたらと思います！

【當間ローズの活動】海外にルーツを持つ子供達や特別支援学校に、捨てられてしまう花達(ロスフラワー)と共に「違いは個性、個性はあなただけの魅力です」というメッセージを届け講演を行う「薔薇色の人生プロジェクト」を立ち上げた。NHK地球ラジオでは世界中にいる日本語補習校の生徒たちの作文を読んだり、世界中の話題を日本に、日本の風習を世界に放送中。今の夢は【武士の役でNHKの大河ドラマにちょんまげを付けて出演する事！】



国内の日系社会 ~多文化共生・地方創生に向けた取り組み~



齋藤 俊男(ティーエスグループ代表)(埼玉県)

ブラジル・パラナ州出身の日系2世。大学卒業後、体育教師として働いた後、1990年来日。1995年に人材派遣会社を創業、2008年リーマンショックを機に農業に参入。「株式会社ティー・エスファーム」設立、長ネギの栽培を始め、自社開発した長ネギを「葱王」としてブランド登録し、高級デパートやレストランなどで販売しています。また、2009年ブラジル人子弟向けの「学校法人ティー・エス学園」を創設(2017年認可保育園に)、2018年には「ティー・エス財団」を設立し、大学進学を支援しています。2014年埼玉県の親善大使に任命され、2018年外務大臣表彰を受賞。現在も日本とブラジルの関係強化に努めています。

※株式会社ティー・エスファーム <https://www.negiou.com/>

自社ブランドの葱王!



安富祖 美智江
(NPO法人ABCジャパン理事長)(神奈川県)

ブラジル・サンパウロ出身の沖縄系二世。在日35年、横浜市鶴見区に33年在住。地域のブラジル人や南米系日系人への相談ボランティア活動をきっかけに、仲間と共にABCジャパンを設立し、その後NPO法人化。2016年より理事長として、行政機関や学校、在日ブラジル大使館・総領事館等と連携し、定住外国人当事者として外国人住民の生活・教育支援を行っています。2018年にブラジル国家勲章、2019年に外務大臣表彰を受賞。

※NPO法人ABCジャパン <https://www.abcjapan.org/>



放課後、ボランティアの先生達と勉強する子ども達

照屋エイジ(愛知県)

(弁護士/国外就労者情報支援センター(CIATE)専務理事)

日系3世。ブラジルサンパウロ出身。8歳で来日、日本の公立学校に通い、中学3年から弁護士を目指し始めました。名古屋大学法科大学院卒業後、2018年在日ブラジル人で初の日本の弁護士資格を取得しました。現在、サンパウロ市内の国外就労者情報支援センター(CIATE)の専務理事として働いています。当センターでは、日本への就労希望者に対する日本語講座の提供や、日本で就労した方の老齢年金やご家族の遺族年金の受給手続きのお手伝いなどを行っています。



CIATEの相談窓口にて



大城ロクサナ

(一般財団法人ひょうごラテンコミュニティ共同代表理事)(兵庫県)

日系ペルー人二世。1991年来日。1995年阪神・淡路大震災の被災者となり、2000年より外国人支援を開始しました。2011年「ひょうごラテンコミュニティ」として独立(2023年より一般社団法人を取得)、スペイン語圏住民を対象に学習支援や生活支援、スペイン語情報月刊誌の発行(無料配布)、ラジオ番組ラティナの放送、「ラテンクリスマス」といった地域交流イベントなど、当事者ならではの視点で様々な取り組みを実施しています。2024年に「海外で活躍するペルー人」としてペルー政府より表彰。

※一般社団法人ひょうごラテンコミュニティ<https://www.hlc-jp.com/>



スペイン語母語教室にて

群馬県 村山俊明大泉町長メッセージ

日本で多くの日系人が暮らすのが、群馬県大泉町。他の自治体に先駆けて、多文化共生に向けた様々な行政サービスを提供等、30年以上にわたる町の取り組みが成功し、多文化共生社会を築いています。その取り組みについて、村山俊明大泉町長にメッセージをいただきました。



現在の町では、南米系日系人をはじめ、55か国、町の全人口の約21%の外国籍の方々が住んでおります。本町の傾向として、約70%以上の方が定住にあり、大泉町で生まれ育った若者も極めて多く、公立小学校のクラスの中には、約40%の外国籍の子どもがいる教室もあります。

そういった中で大泉町は、全国で3例目、町村では初めて、「人権擁護条例」を制定し、さらに全国町村初の「パートナーシップ制度」を取り入れ、ダイバーシティを念頭に入れた取組みを実施しております。

また、今後の日本経済や介護、看護のエッセンシャルワーカーの必要性を感じ、取り組んできているところでございます。本町は、企業・工業の町であり、町経済の維持・発展には、外国人労働力が必須となります。多文化共生につきまして、現在、町では、南米系の外国人の方に向けた広報誌(ガラツパ)を発行しております。

外国籍の児童・生徒の日本語能力を向上させるため、日本語学級を全ての公立小中学校に設置し、特別支援学級などでも個々の日本語能力に応じた適切な指導体制の充実を図っております。また、本町民は多国籍のため、子どもたちには、共通語としての英語教育を強化し、私立・公立を問わず、保育園・幼稚園・認定こども園・各公立小中学校および児童館などにも町公費でALT・JTE(英語指導員)を配置し、英語教育に注力しているところであります。

さらに、外国人キーパーソンを発掘し、災害時などには、正確な情報をSNS等を使い、拡散してもらえ体制づくりや、日頃より様々な町内のボランティア活動に参加していただいております。

多国籍の町であるため、ごみ問題や騒音問題等が懸念されることもありますが、大きなトラブル等は今まで発生しておりません。また、生まれも育ちも大泉町である若者が国籍による職業の選択に差別がないよう、町職員の採用試験における国籍要件を撤廃しております。

今後、少子高齢化が進み団塊の世代の高齢化などを考慮し、外国籍住民も町民として、納税義務を課している以上、公平な行政サービスを行うことが重要だと考えております。

町としては、多文化共生について、先進的行政政策を今後とも打ち出すとともに、「郷に入れば郷に従う。大泉町は、あなたの国ではない。ここは日本である」ことを基本に、様々なマナーやルール等をしっかりと啓発し、情報発信をしながら、お互いを思いやるまちづくりを進めていきたいと考えております。



大泉町公式マスコットキャラクター「イズミオ〜」

「Japão Nosso De Cada Dia(私達の日本の日々)」(YouTubeチャンネル)

日本の日常生活、食べ物や文化、観光スポットなどをバラエティ番組のように気軽に楽しく紹介するチャンネルです。登録者数250万人以上! 運営者の栗山プリシラ(プリチ)さんとローマン・タレス・ジョナタン(ローガン)さんは共に日系3世の夫婦。「日本の魅力は言葉だけでは伝えきれない。それなら映像で伝えてみよう!」と、2013年にこのチャンネルを立ち上げ、現在、週に1本の動画を投稿し、Twitchでも週4回ライブ配信を行っています。二人の目標は、日本の素晴らしさをブラジル人に伝えること。フレンドリーなアプローチで、10年以上にわたり高品質で一貫性のあるコンテンツを制作し、多くのファンに愛されています。



中南米の日系社会と連携強化

～政府・オールジャパンでの取り組み～

Interview!!

萩原工業株式会社のパラグアイ事業

高宮純一経営企画室社長特命担当部長

2018年11月に開催されたJICAの第8回中南米民間連携調査団(中南米日系社会との連携調査団)の一員としてパラグアイとペルーを訪問したことが、当社のパラグアイ進出のきっかけになりました。

日本人とルーツをともにし、海外で成功、活躍する日系人への憧れから、現地のことを日系人の方から直接聞きたい、学びたい、交流してみたいとの願いもあり、このJICA事業に参加しました。もしできることなら、日系人の方々と現地と一緒にビジネスができれば、どんなに素晴らしいことだろうとも願いつつ、それを実現したいとも切望していました。

当社、萩原工業株式会社は、瀬戸内海に隣接した岡山県倉敷市水島に本社がある東証プライム市場の上場企業です。当社は、合成樹脂繊維の「フラットヤーン(平らな糸)」を素材として用いたシートや梱包材などの関連製品、独自の技術で開発した産業機械を国内外で製造、販売する企業です。実は、当社は国内産ブルーシートのトップシェアを誇る企業でもあるのです。

現在、海外には13カ国に拠点を置いてグローバルに展開しています。中南米地域においては、すでにメキシコ、ブラジル、ペルー、チリの4カ国に販売会社を置き、コンクリートの補強繊維材であるバルチップという製品を販売しています。なお、中南米地域におけるバルチップ販売の拡大により、2022年には5カ国目となるパラグアイにバルチップの製造拠点として、新たな工場設置を実現しました。

今回、パラグアイへの進出の契機となったJICA事業に参加して、現地でも多くの日系人の方々と交流することができました。同時に、現地のビジネス環境のみならず、現地でのビジネス展開のコツ、日系人が考えるビジネス展開の発想やそのスケールの違いなど、楽しくたくさん学ぶことができ、日系社会との新たな人脈形成にも役立ちました。

こうした背景、経緯もあり、実際にパラグアイに進出した際には、多くの日系人の方々と人脈を活用することができ、あらゆる面でお世話にもなりました。現在、現地で働く社員の中には日系人の方々と、現地の日系



パラグアイイグアズ社竣工式

社会の学校で日本語を学んだ現地の方々が重要な業務を担っています。また、こうした社員がいることで、当社の日本側とのコミュニケーションでは日本語にて事が足りず、現地側との橋渡し役としても活躍してもらっています。日本語、英語、スペイン語の3か国語にて対応可能な人材が必要な他の海外業務においては、日系人の方を日本本社の社員として正式採用し、米国への海外駐在員としても派遣しました。

お陰様で、日系社会との連携はとて深まっています。今後とも当社としましては、さらに日系人の方々と、日系社会との連携を深め、お互いの双方ともに、また日本と中南米地域の関係諸国とともに、引き続き成長、発展することを願っています。



パラグアイ外相本社表敬



現地社員と

プロフィール

2018年に現在の萩原工業に転職。当社の企業価値向上及びグローバル化を推進するため、IR、広報、経営企画及び国際業務などに従事。前職はETRO職員として26年勤務、その約13年間はタンザニア、イラン、エジプトの中東アフリカ地域に駐在。防災士。公共政策学修士。地方創生、地方経済の活性化、地域防災に関心あり。

農林水産省

日系農業者等との連携

中南米の国々は、ブラジルをはじめ穀物等の世界の食料供給地であるとともに、日本食への関心も高く、日本の農林水産物や食品の輸出においても、重要性が高まっています。「中南米日系農業者等との連携強化・ビジネス創出事業」では、日系人の方々の世代交代が進んでいく中で、日本との交流が希薄になってしまうことがないように農林水産業・食産業の分野において研修や交流会を通して連携を強化するとともに、日本食品関連の商談会など、新たなビジネス機会の創出を図っています。



日本への招へい事業による農場視察

サンパウロ日本祭りにおける日本食・食文化の魅力発信

ブラジルには、世界最大の日系人コミュニティがあります。2024年のサンパウロ日本祭りにおいて、「第1回ふるさと“いいもの”展」を開催し、各都道府県の特産品を紹介するブースの設置や、日本酒をテーマとしたセミナーの実施など、日本産品をPRするとともに、現地日系社会と連携して現地インポーターを招いて商談会の場を設けるなど、輸出促進に向けた取り組みを行いました。



ふるさと“いいもの”展の都道府県ブース

独立行政法人国際協力機構(JICA)

海外移住事業団などから事業を引き継いで1974年に発足したJICAは、世界全体の日系人約500万人の約6割に相当する約310万人が暮らす中南米地域を主な対象として、1993年度まで国の海外移住者送出国業務を担うとともに、移住先国での定着と生活の安定を図るための支援を行ってきました。日本と中南米の強い絆として、移住者やその子弟が果たした役割は大きく、JICAでは日系社会のニーズに沿って、助成金交付事業、日系社会次世代育成研修、日系社会リーダー育成事業、日系社会研修、ボランティア派遣、海外移住資料館の運営、その他各種事業(民間連携事業、草の根技術協力事業、中南米日系社会との連携調査団派遣等)を実施しています。

<https://www.jica.go.jp/overseas/america/support.html>



サンパウロ日本祭りに参加する日本企業(ブラジル)



海外移住資料館で自分たちの日系ルーツについて学ぶ日系人中学生(横浜市)



在日日系人子弟の学習支援に取り組み 日系サポーター(静岡県浜松市)



「和食ビジネス振興」でのそば打ち体験(大分県豊後高田市)

外務省 中南米日系社会との連携

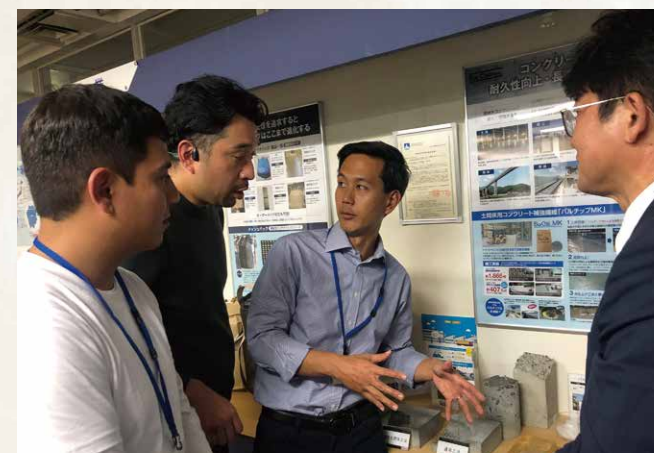
日系社会は、中南米諸国の親日感情の基礎となっている一方、移住開始から100年以上を経て世代交代が進んでおり、若い世代とのつながりをどう深めていくかが課題となっています。そこで、外務省は、若手日系人の訪日招へいに加え、各国の若手日系人によるイベント開催を支援し、ネットワーク作りを後押しするなど、日系社会との連携強化に向けた施策を実施しています。2023年1月には、これらの施策をより総合的に実施するために「中南米日系社会連携推進室」を設置しました。

2024年5月岸田総理大臣がブラジル及びパラグアイを訪問した際、日系人との懇談を行ったほか、同年11月に石破総理大臣がペルー及びブラジルを訪問した際にも、ペルー日系人協会への訪問や現地の日系人との懇談を行いました。また、岩屋外務大臣も、11月のペルー訪問の機会に日系人との懇談を行うなど、現地での交流を通じ、日系社会との連携を強化していくことを確認しています。

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/latinamerica.html>



次世代日系人指導者会議招へい



JUNTOS!対日理解促進交流プログラムでの企業視察



東日本大震災被災地を訪問(岩手)